

薬用植物栽培に意欲

青森 産学官の研究会が発足

本県での薬用植物栽培と産業化の可能性を

探ろうと、県内の研究機関や大学、自治体、県内外の企業が集まり、5日、「青森産業用植物栽培研究会」を設立した。青森市の青森グランドホテルで開

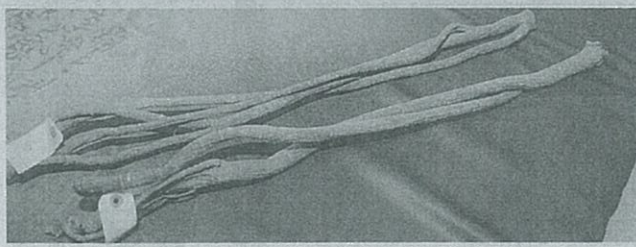
いた設立会では、薬用植物の国内栽培の現状について情報交換しながら、本県の栽培適地性など今後の検討課題を確認した。

関係者が参加。県や目立製作所の関係者もオプザーバーとして出席した。県産業技術センター野菜研究所が事務局となり、同センターの唐澤英年理事長が会

長に就任した。唐澤会長は「薬用植物は寒冷地に向いているとされる。県内で栽培に適した品目を探り、本格的な栽培につなげていきたい」と語った。

薬用植物研究の第一人者である新日本医薬顧問の草野源次郎氏(元大阪薬科大教授)は、試験栽培が始まった甘草を取り上げ、「漢方薬の70%に配合されているほか、畜産業界で抗生物質の代わりとして注目されるなど利用拡大の可能性が大きい。ぜひ国産化を進めたい」と話した。(行方知代)

設立会には、新郷村とともに甘草(かんぞう)の試験栽培に取り組む新日本医薬(本社・福岡市)、アシタバの県内栽培を検討して



薬用植物の国内栽培の重要性を話す草野顧問(右から3人目)。写真は本県の栽培適地性を検討するため、試験栽培が始まった甘草